

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00237

研究課題名(和文) 柴田南雄のシアター・ピース作品の演奏解釈 身体的・空間的な演出を中心に

研究課題名(英文) Interpretation of performance for Minao Shibata's Theater piece -On physical and spatial production-

研究代表者

徳永 崇 (Tokunaga, Takashi)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授

研究者番号：90326497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：わが国を代表する作曲家の一人である柴田南雄の重要な活動の中に、シアター・ピースと呼ばれる作品群がある。これらは、歌手の自発的な所作を伴う優れた合唱作品であるが、演出の解釈が多様であり、近年は演奏の機会も減少傾向にある。そこで本研究では、いくつかの合唱団の協力の下、作品の実演を通して演出の実態を調査し、再演に活用できる記録を残すことを目的としている。その結果、単に演奏上の身振りや配置の工夫を行うだけでなく、衣装、照明、小道具、特別な楽器など、様々な準備の必要性が確認された。上記を小冊子にまとめ出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

柴田南雄のシアター・ピースは、日本の伝統芸能を新しい視点で捉えなおし、現代の音楽へと昇華した優れた合唱作品群である。また、合唱という一般市民が親しむ媒体を用いたことにより、広くその価値を共有できる可能性をもつ。しかし演出に係る解釈の多様性から、演奏には相当な準備と工夫が必要であり、困難と感じる歌手も少なくない。本研究は演奏に必要な準備や演出の実態を参照可能な形で記録することにより、演奏の一つの可能性を提示することから、再演の一助になると考える。

研究成果の概要(英文)：One of the important activities of Minao Shibata, one of Japan's leading composers, is a group of works called Theater Peace. These are excellent choral works accompanied by the singer's voluntary actions, but the interpretation of the production is diverse, and the opportunities for performance have been decreasing in recent years. The purpose of this study is to investigate the actual situation of the production through the demonstration of some works with the cooperation of several choirs, and to keep a record that can be used for the re-performance. As a result, it was confirmed that it is necessary to prepare various things such as costumes, lighting, props, special musical instruments, etc., in addition to simply devising gestures and stage arrangements in performance. The results of the survey were published as a booklet.

研究分野：作曲、音楽学

キーワード：柴田南雄 シアター・ピース 合唱 演出 日本の作曲家 現代音楽

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

柴田南雄(1916-1996)は、戦後の我が国を代表する作曲家の一人である。彼は作曲のみならず、音楽学における多くの著述や評論、音楽祭の企画、大学での教育などその活動は多岐に渡るが、その中でも特に重要な業績として、1970年代から90年代にかけて作曲された「シアター・ピース」と呼ばれる合唱作品群が挙げられる。「シアター・ピース」は、歌手の身振りや配置などの演出を伴い、かつ日本の伝統音楽の素材を生気あふれる形で取り込みつつ演奏される、独特な合唱作品である。作品によっては、テーマとなった地域の様々な音楽や文芸を素材とするだけでなく、現地の民俗芸能の演奏団体を公演に取り込むなど、当時の現代音楽の流れとしては画期的であった。第1作目である《追分節考》が1973年に作曲されて以降、プロ・アマ問わず、多くの合唱団の重要なレパートリーとして認知され、度々演奏されてきたが、1996年に柴田が没して以降、その演奏回数は減少傾向にある。その要因の一つとして、即興的な演奏が求められる箇所において、リアリゼーションに関する楽譜中の説明が必ずしも多くないことが挙げられる。特に歌手の身振りや舞台配置などの演出面における解釈が多様であるため、演奏者たちは自ら思考し選択する決断を迫られる。伝統芸能の新しい形の享受や、高齢化社会における社会参画について考慮すると非常に有意義な作品群であり再演が望まれるが、上記が演奏のハードルを高くしていることは惜しまれる。従来は演奏経験者間の情報交換や公演メモの記録、あるいは録音・録画などで楽譜の解説を補足していたが、柴田の存命中に初演・再演を行った演奏者の高齢化が進む中、具体的な演出の記録を後世に残すことが再演を促す上で重要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、柴田のシアター・ピース作品の演奏のハードルとなる点を「即興性のある部分の解釈の多様性」にあると仮定し、それを緩和するための参照可能な演出記録を作成することを目的とする。その際、ステージ上における演出方法のみならず、器具、衣装、照明、団員への伝達方法など、その実現に向けた様々な工夫についても記録し、柴田のシアター・ピースの再演の一助としたい。

3. 研究の方法

(1) シアター・ピースの演奏上の要点の確認

柴田のシアター・ピースの演奏を経験した指揮者や歌手に聞き取り調査を行い、作品の意図や演奏において配慮すべき事項について確認した。その上で、実演を依頼する合唱団を対象にワークショップを開催するなど情報を共有し、演奏作品について理解を深める。

(2) シアター・ピースの実演

研究協力を依頼した合唱団が、演奏会を開催しシアター・ピース作品を実演する。公演時の映像と併せて、実演に必要な器具、衣装、照明など演出に係る様々な事項についても記録する。

(3) 演出方法の記録

実演の記録を基に、歌手の身振りや舞台配置などの演出の実際を、図を用いつつ時系列上にまとめる。また、演奏時の編成、器具、衣装、照明などについても併記する。これらの記録を小冊子にまとめ、成果物として出版する。

4. 研究成果

(1) 柴田のシアター・ピースの演奏経験者への聞き取り調査を行う中で、様々な団体が試行錯誤し、工夫している様子が窺えた。歌手の身振りや移動に即興的な要素が含まれていたとしても、演奏会の演目として上演する以上、大まかな指針を決める必要がある。このことは特に現代作品の経験の少ないアマチュアにとって重要な事項であろう。団体によっては予めコンテを作成し、歌手の配列や移動経路について綿密に計画する事例も見られた。しかし同時に、演出の記録を残すことについて慎重な意見も聞かれた。なぜならば、柴田のシアター・ピースの上演に際しては、人が集い、触れあい、葛藤するというコミュニティの中で醸成される関係性が重要であり、事前に計画された筋書きに従って演じることは、歌手の自発性を損なう危険性を伴う。それが柴田の意図と相容れないことはいままでの間もない。このような意見に触れ、本研究の最終段階でまとめる記録の記述方法についても、配慮が必要であるという気付きを得た。

(2) 協力を依頼した合唱団と協議し、《追分節考》《萬歳流し》《念佛踊》《歌垣》《みなまた》の5曲を上演することとした。それに先立ち、演奏経験者からのノウハウの伝達と、楽曲に関する団員への理解を深める狙いから、2019年5月に広島大学においてワークショップを実施した。ここでは、《萬歳流し》及び《念佛踊》の2作品を扱ったが、特に前者の中で演じられる「門付芸」を参加者に体験してもらう中で、継承者がほぼ途絶している門付の実演記録が必要であることが判明したため、本ワークショップの講師による演奏を別途録音した。これは、《萬歳流し》の再演時に活用できると考える。

(3) 2019年度は、(1)を踏まえた上で、6月に《念佛踊》、2020年1月に《歌垣》を上演し、一般の聴衆に成果を披露した。なお、2020年度は《追分節考》《萬歳流し》《みなまた》を上演

予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大による演奏活動の自粛を受け、2021年度へと延期となった。しかし、それ以降も同様の問題が継続したことから、2021年度は7月の《追分節考》の上演のみとなった。歌い手が客席フロアを移動するなど、通常の音楽演奏と比べ感染拡大の懸念が大きいシアター・ピースの演奏は、相当の配慮と困難を伴う。そのような中、舞台背後にあるステージ・バック席やバルコニー席を活用し、歌い手の動きを制限しつつ観客との距離を確保した《追分節考》の上演は、多くの工夫が凝らされ、コロナ禍におけるシアター・ピース上演の可能性を広げる貴重な機会であった。

(4) 作品の上演・記録と並行して、学会等での発表を行った。2018年6月に開催された日本音楽表現学会第16回(折り鶴)大会では、柴田南雄の晩年のシアター・ピースの特徴について発表した。ここでは、様々な地域の伝統芸能を現地の演奏者ごと作品に取り込む傾向にある《遠野遠音》《みなまた》《深山祖谷山》《三重五章》《府中三景》に見られるシンメトリックな構成とその背景について触れた。また、2019年4月には、ヘルシンキ大学で開催された“Japanese Music Seminar”において、柴田のシアター・ピースのハイブリッド性について講演した。論文としては、『増山賢治先生退官記念論文集』において《念佛踊》の具体的な演出をセクションごとにまとめた論考を2020年に寄稿した。

(5) 上演した《追分節考》《萬歳流し》《歌垣》の上演録画、及び演奏団体から提供された資料を基に、使用した器具、衣装、照明、舞台配置、移動の導線などについてまとめた。特に演出の具体となる身振りとステージ上での動きについては、舞台図を用いて時系列に記載した。まず、新型コロナウイルス感染防止対策を行った上で上演された《追分節考》では、歌い手の客席フロア内における移動は避け、ステージ・バック席やバルコニー席を演奏専用のスペースとし、その範囲内で動くよう制限していた点が特徴である。指揮者の即興による演奏指示のための団扇や、それらを置くテーブルの準備が必要であることは勿論のこと、上記を含む歌い手の可動範囲を予め決めておくことで、上演時の混乱を減らす工夫も見られた。続いて《念佛踊》では、歌い手への合図として様々な色の「幡」が用いられる、さらには楽譜の解説には記されていない「巫女」が登場し「御蟲様」を祭るなど、作品を一つの壮大な儀式へと昇華する試みが見られた。加えて本演目には、「双盤」と呼ばれる大型の鉦や、和楽器奏者による演奏が必要であり、それらの調達方法や費用についても考慮すべきである。なお、上記2作品については、照明による演出も効果的に用いられた。《歌垣》については、大人数で演奏される機会の多い作品ではあるが、今回は若干15名という少人数による演奏となった。演奏会場も教会というシンプルな空間が用いられ、2階の客席を活用する、ステージ上の配置をセクションごとに変化させるなど、楽譜には明記されていない要素が様々に演出されていた。これら3作品の記録を、「柴田南雄のシアター・ピースの演出に関する調査」として小冊子にまとめ出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 徳永 崇	4. 巻 1
2. 論文標題 柴田南雄のシアター・ピースの演出 《念佛踊》を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 増山賢治先生退官記念論文集	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Takashi Tokunaga
2. 発表標題 Hybridity in Japanese music: focus on “Sugaguchi goiwai”
3. 学会等名 Japanese Music Seminar
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徳永 崇
2. 発表標題 柴田南雄の晩年のシアター・ピースの特徴 「シアター・ピースの新しいシリーズ」に着目して
3. 学会等名 日本音楽表現学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 徳永崇	4. 発行年 2022年
2. 出版社 柴田南雄のシアター・ピースに関する研究会	5. 総ページ数 20
3. 書名 柴田南雄のシアター・ピースの演出に関する調査	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Japanese Music Seminar
<https://blogs.helsinki.fi/japanese-music-seminar/>
日本音楽表現学会第16回(折り鶴)大会
<http://www.music-expression.sakura.ne.jp/meeting/meeting-16.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------